

# 大学の自由についての一考察（その一）

——ベルリン大学創設前後の論文をめぐって——

田 中 未 来

## 一 序

大学の本質、およびそのありかたは、現在さまざまの角度から論じられ、また検討されている。しかも、それはすでに教育上の問題としてよりも、社会的、政治的な問題に発展しつつあるのが現状である。

もとより大学は、決して現代社会から孤立した存在ではなく、大学問題は、根源的には現代社会のもつ種々の問題と深い関連があるのは当然といえる。しかし、大学が「教育機関」の一種である以上、まず第一次的には教育学の中で、その問題の把握がなされなければならないと考える。

戦後の日本において、教育学が他の分野たとえば初等、中等教育などに関して展開した研究にくらべると、なぜか大学教育の本質に関する独自の研究は比較的小なく、その問題の重要性が教育学の内部で、十分に把握されていなかったように思われる。したがって日本の新制大学は、内容的な必然性からでなく、むしろ外から与えられた制度として発足し、その後、大学の性格や内容は、部分的な修正のみで現在に至っている。

その間に潜在的に蓄積された矛盾や問題点は、最近大規模な学生運動となって指摘され、大学関係者は、望むと否とにかかわらず、大学制度の検討を緊急の課題とせざるをえないのが現状である。もとより最近の学生運動の原因は大学内部のみに存在するのではなく、

むしろ、社会体制や政治の現状に対する批判との複雑なからみ合いの中で発生しているのが実状である。そのことを充分に認識した上で、やはり一次的には、教育学的見地からの本質的な検討が必要であると考ええる。

これはすでにおそきに失した感があるが、新制大学発足のとき、制度が先行したことの弱点を、今回再びくりかえさないためにも、ますます教育の主体性の確立と基本的な考察の態度の必要を感じるのである。

この大きな問題に直面して、その一端にもふれるには、わたしはあまりにも微力であるが、大学教育の末端にかかわる一人として、また教育学をまなぶものの一人として、自分自身の思考や、態度を整理するため、この小論をまとめ、諸氏のご批判をあおぎたいと思う。なお引用した資料等はすでにわが国に紹介されたものが多いが、先輩の説に学びつつ自分自身の解釈をすすめたいと思っている。

## 二 大学の本質と大学の自由

大学の本質の探求にあたり、まず「大学の自由」の解明を手がかりとすることに定めた。

「大学の自由」は、伝統的に大学の存立にとって不可欠の条件と考えられて来たが、さらにすすんで、自由は大学の条件というより、むしろ大学の属性の一つ、すなわち大学の本質の側面とさえ論ずる学説も多く見られる。そこで今回はこの角度から大学の本質へのアプローチを試みたいと思う。

なお現在「大学管理臨時措置法」をめぐって日本でも「大学の自由」を守ろうとする動きが活発になったが、その種々の運動の中には、立場や主眼のおき方などに、微妙な相違点と、共通点が混在しているように思われる。また歴史的に見ても「大学の自由」の概念は幾たびかの変化を示している。

この小論では、歴史的に見て、大学の転機をもたらしたいくつかの時期をとりあげ、事例に即してこの主題の解明を行いながら、現在わたくしどもが直面している課題への手がかりを求めたい。

の概念の中には、どのような観点があり、また要素がふくまれるのか、またはふくまれ得るかを、あらかじめ概観することにする。ついでそれらの「自由」が、大学の本質とどのようにかわりをもつのかを事例に即して考察したい。

もちろんこれらの観点や要素の全部が、はじめからふくまれていたわけではなく、その時代ごとに、また各国ごとに、「大学の自由」のある側面が強調され、他の側面はあまりとりあげられないという事情もあり、また自由の縦の側面が互に矛盾しあうばあいもないとはいわれないが、一応、現在の時点までに考え得る要素をはじめに列挙してみたいと思う。

### 三 「大学の自由」にふくまれる要素

歴史的考察に先立ち、まずはじめに「大学の自由」の中にふくまれる要素を、三つの観点にわけさらにそれを細かく分析したいと思う。第一は「自由」の主体と、対象との関係、すなわち、「大学の『なに』が『なに』

に』に対して主張すべき自由であるか」という観点である。第二は、自由の内容、すなわち『なに』をする自由かという観点である。第三は自由の目的、すなわち「なにのための自由か」という観点である。まず第一の観点から少し分析を試みたい。主体と対象との関係における自由は、やや公式的ではあるが、つぎのように整理することができると思う。

一、大学と外部の権力との関係における自由

(一) 国家権力に対する自由

(二) 社会的権力、経済力、習俗等に対する自由

二、大学内部の自由

(一) 教員の自由

a 教授会の(管理者に対する)自由或いは自治

治

b 教員の(管理者あるいは講座制その他のヒエラルキーに対する)自由

エラルキーに対する)自由

(二) 学生の自由

a 学生団体の(管理者又は教授会に対する)自

## 由、自治

### b 学生個人の（学習の）自由

#### (三) その他の大学構成員の自由

これらは相互に関連しあっているものであるが、大学の自由、あるいは自治をとなえるとき、それぞれの立場によって重点のおき方が異なっている場合が多いので、一応整理の一段階として分類を行った。これに関する考察は後に、事例に即して行いたい。

第二の自由の内容を分析すればつぎのようになる。

- 一、教授の自由
- 二、研究の自由
- 三、発表の自由
- 四、学習の自由
- 五、生活の自由
- 六、運営管理の自由

このうち、一は教員のもつべき自由であり、四は学生のもつべき自由であるが、その他は教員、学生（院生を

含む）に共通の自由である。なお、五の生活の自由について附言すれば、これはヨーロッパの大学の伝統としてまとめられて来たもので、たとえばシェリングが *Lehr Freiheit*（教授の自由）*Lern Freiheit*（学習の自由）とならんで *Lebens Freiheit*（生活の自由）をあげているなどはその例である。これは、ある時期には法律上、道徳上の治外法権を意味したが、しだいにそれらの特権は少くなっても、世間の習俗によって生活を拘束されないという考え方はかなり後まで残ったのである。また六は五までを保証する条件として考えられる。

第三の観点、すなわち自由の目的を分析すればつぎのとおりとなる。

- 一、学問あるいは教育が自らの主体性を守り、かつその発展を阻害されないための自由
- 二、学問あるいは教育が既存の体制の維持のためにのみ利用されることなく、むしろ新しい社会体制を生み出す理論的な原動力となりうるための自由

一の意味での自由は、いわば大学の属性ともいうべきもので、たとえ保守的な又は愛国主義的なイデオロギーに立つばあいも、しばしば主張されている。しかし二の意味での自由は広い、意味で社会の進歩、改革を志向するもの、すなわち、現在の社会体制に批判的である場合、あるいは人類の福祉が現在よりも将来により一層増大することを希望する場合、そのために大学がある役割をもつべきであるとき主張されるものである。

以上、大学の自由を大きく三つの観点にわけ、さらにそれを細分したが、現象的には、これらは重なりあい、また錯綜して、ある主張となってあらわれるものである。しかし、現在一般に大学問題についての論が、複雑な諸要素を概括的にとらえたり、しばしば論理の飛躍や、短絡的な思考方式が行われるので、便宜上、このように整理しながら相互の関係について考察をすすめたいと思う。

考察にあたっては、大学の自由が高揚されたいくつ

かの時代を把握、それぞれの時代の思想や主張を事例として、前記の自由の概念の解釈と意味づけを考えながら、最後に現在の大学の問題に及ぶことができれば幸いである。

「大学の自由」の主張は、周知のとおり中世末期の大学の発生にはじまる。とくに、イタリア、フランス等においては、はじめから、学者の組合 Universitas Magistrorum と学生の組合 Universitas Scholarium との自由で対等な相互契約によりはじまった自然発生的な集団が大学の原型といわれ、これは、政権や教権に対しかなりの自主性をもっていたものといわれる。

また、教科そのものの名称も、一般教育にあたる部分を「七自由科」と称した。この「自由」の意味は、職業教育に対する、一般性をもったもの、いいかえれば奴隷ではない、自由民の教養というほどの意味でとらえられていたようである。

しかし、この時期の大学の姿は、わたくしたちの現

実に直面している大学問題とはあまりにもへだたりがあり、未分化ながら、ほぼ無制限の自由をもっていたかかのような観がある。「ボロニア大学当時の姿にかえれ」という論は、やや現実的でないとしても、大学の始源がこのように自由な姿をもっていたということ、を、わたくしたちは充分想起すべきであろう。

つぎに、近代的な学校制度としての大学が確立した後、国家権力などとの間に深刻な問題をもち、あらためて大学の自由が真剣に論ぜられたのは、近代初頭のベルリン大学創立当時である。この時期は、いろいろな意味でわたくしどもの今日の問題を考える上の手がかりとなるので、本稿ではこの時期の論文を中心として考察をすすめたいと考えたしだいである。

#### 四 ベルリン大学創立の時代的背景

十七世紀末から十八世紀初頭の、ドイツ（当時プロイセン）の大学は、主に国立大学の部類に属するものであった。啓蒙的専制君主の代表とされたフリードリ

ッヒ一世に引つづき、フリードリッヒ二世の反動的教育政策が行われた後、一七九七年フリードリッヒ三世が王位につき、一応自由主義的教育政策に転換したが、それは、専制君主制下における自由主義政策であり、自ずから限界があったことは当然である。やがて一八〇六年、プロイセンは、フランスに宣戦布告してナポレオン戦争の渦中に入り、翌一八〇七年には敗戦という経過をたどった。敗戦後のプロイセンは、ナポレオンすなわち戦勝国の軍司令部の政策と、国王フリードリッヒ三世の行政方針との二重の支配下にあつて、複雑な情勢のもとに、教育と学術の振興による祖国復興のねがい、政府当局の側からも、学者や民衆の中からも、それぞれ異ったニュアンスを含んでもり上つたのである。

こうした中で、ベルリン大学の創設のしごとは進められたが、この中にも二派の動きがあつた。一方は、ナポレオンによって閉鎖されたハレ大学の全面的なベルリン移転で、これはいわば専制政治下における保守

的な大学の復活を意味していた。他方は、この際大学の本質を再確認し、「大学の自由」の理念にもとずいた新しい構想による本格的な大学をベルリンにつくろうという動きであった。この二つの動きは、政情の変化によって種々の曲折を見たが、ついに、自由主義的な学者フンボルトが宗教教育局長官（当時内務省の下に属していたが、ほぼ文部大臣の地位に相当する）に就任するに至って、一八一〇年新構想の、いわ後者の立場に立つベルリン大学は創立の日を迎えるのである。この間の経過は、梅根悟氏「大学論」その他勝田守一氏の解説、西村貞二氏「フンボルト」、桑木勉氏「哲学の世界はじめ諸氏の著書で明らかにされている。

したがって当時の学者、とくにドイツのイデアリスムスの立場に立つ学者のおかれた状況は複雑なものであったことが推察される。すなわち、彼らは、精神的な自由を求めるが故に、たとい啓蒙的専制政治にしても専制政治とは本質的に相いれないものがあったが、それが政策の変化につれて、あるときは敬遠され排

斥されたり、また上からの啓蒙のために起用されたり、さまざまな境遇におかれた。そこに隣国フランス軍の占領という事態が生じたが、ナポレオンの政策は、それまでのプロイセンの専制君主制に比しては近代的であり、この敗戦によって専制君主制の崩壊という一種の進歩的な効果を得たことは否めない。しかし反面他国の占領政策のもとにあって、ドイツ民族の主体性をうばわれるという悲劇をも味い、その意味で彼らは民族の主体性の獲得のために愛国心をよび起す必要を感じたのである。

したがって、この時代のイデアリスムスの一派は、そろって、国家権力の専制からの学問、思想の自由を訴えると同時に、ドイツ民族としての愛国心を高揚するという二重の立場をとっている。ただしこの場合の愛国心は、日本の戦前の愛国心のように、専制君主制への忠誠を意味するものでなく、他民族の支配からの精神的独立であった。そしてこの二つの主張をつらぬくものは精神の自由であったと考えることができる。

この点、歴史的な条件は全く異なるが、戦後の日本の状況、すなわち、敗戦による専制政治からの解放が、ただちに他国の支配下におかれることを意味した複雑な体験と一脈相通ずるところがあるように見える。

## 五 カントの大学論を中心として

はじめに、カントの大学論の中から、さきにかかげた観点にしたがって大学の自由の主張をとりあげて見たい。

カントはケーニヒスベルクの大学の教授で、直接にベルリン大学の創設に関係したのではないが、ベルリン大学の新構想の源となったドイツのイデアリスムスの基礎をきずいた学者として有名であり、また彼自身学「部の争い」という論文の中で、大学の本質について論じている。

学部の争い (Der Streit der Fakultäten 1798)

は一言に言えば、当時上級学部といわれた神学部、法学部、医学部に対し、下級学部と称する一般教育学部

を、哲学部として確認し、この哲学部の重要性と、いわゆる上級学部に対する優位性を主張したものである。

便宜上、「学部の争い準備原稿」の訳出(邦訳カント全集十六巻渡達雄氏訳)によって、とくに大学の自由に関連して論じた主張を引用すればつぎのとおりである。

まず彼は、神学部、法学部および医学部の役割を論じ

「人間の本質的な問題は三種である。一、身体(そしてこれに依存する精神)が健全であり、二、生前国家の合理的かつ幸福な成員であり、三、死後永遠に幸福であること、ということである」

という社会通念をのべている。そして一は医学部、二は法学部、三は神学部であり、理性的に言ってその重要な順序はこの逆で、神学部が筆頭におかれているべきであると説明している。しかし、彼にいわせれば、これらのいわゆる上級学部は、それぞれの基礎的な学問、たとえば語学や歴史学や自然科学などの教養と、さらにその根底におかれる哲学なしには、その社会通



念とされている役割もはたせないとし、第四の学部、すなわち哲学部の意義をのべている。

この学部は本来の哲学と、哲学が道具として使用する技術ないし学問、すなわち数学と自然科学を理性的目的のために、そして練達性を理性使用の促進のために含むものである。」

と説き、さらに、彼はこの「哲学部」の優位を主張し、そこにこそ大学の自由の本質があると説いている。

「しかしながらそれら上級の三学部はこれ（注 哲学部をさす）と調和するよう努めるべきであろう。

なぜなら、それらはすべてこれ（哲学部）を必要とするのであり、またこの影響なしには長つづきしないものであるから。——これらの学部（注 神学、法学

医学部をさす）は経験的なものの優位を目ざし、哲学部は理性的なものの優位を目ざすので、前者は常に後者と争っていなくてはならないのである。ただ、哲学だけが常に自由でなくてはならず、（傍点は本稿の執筆者の便宜による。以下同じ）また哲学だけが、

けっきょく決定を与えることができる。なぜなら哲学は実践的な理性使用の最高の条件を含んでいるからである」

といている。彼の主張をつきつめれば、他の学部が経験的なものの研究を主とする以上当然、国家、権力や宗教的權威等の外的な力からの要求を受けるのに対し、哲学は理性そのものを追求するので、完全に外的な権力からは自由であるし、また自由でなくてはならないとして、その哲学部の優位をみとめることにより大学の自由の基盤が保証されると考えている。またカントは同じ論文で国家権力と学問の自由について

「政府は、しかしかの部類の知識を取りあつかうべきであると命ずることはできるが、政府自身が課するものを真と考えるように命ずることはできない。」として、大学の（とくに哲学部の）教授内容の自由を主張している。

カントのばあいの「大学の自由」は、さきの観点にしたがえば、第一の観点では国家権力およびその他の

外からの力に対する自由を、第二の観点では研究および教授の自由を、第三の観点では、学問それ自体を守るための自由を意味し、それは哲学部の尊重により実現できるとしている。

## 六 シェリングの大学論を中心として

カントについて、フィヒテも、有名な大学論を展開しているが、紙数の関係で省略したい。

つぎにシェリングの大学論のなかから、とくに大学の自由に関する説を彼の著 *Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums*-1803 (勝田守一氏訳 学問論)を通して概観することとする。

第一講においてはシェリングもカントおよびフィヒテの説をうけて、その講のはじめに、学門の有機的全体の認識の必要性を説いている。これはカントの「哲学部」の主張に似ているが、彼は「哲学部」とは言わず、むしろ哲学は全体の学門に浸透すべきであるとして、もし独立するとすれば芸術学部であるとした。

「したがって個々の専門のための特殊な教養の前に学問の有機的全体の認識が先立たなくてはならぬ。

一定の学問に身を捧げるものは、その学問がこういう全体の中で占められる地位とこの学問の生きた魂である特殊の精神とを、またこの学問を全体の調和的構造にむすびつけるこの学問の完成の方法を従ってまた、この学問を彼が奴隷としてではなく、自由人として、全体の精神において考えるために、彼自身この学問をどういう風に弁えなくてはならぬかというその弁え方を熟知しなくてはならぬ。」

といている。彼は、専門的な学問を、自由人として主体的にとらえるためには、学問全体の有機的な認識がまずおこなわれなければならないといっているのである。

またシェリングも、カントの立場を受けて、真の自由は経験の世界ではなくて、先験的な理性の中にあるとし

「人々が経験的行為のうちに求め、或は見出すもの

と思っているような自由は、経験的知識のうちに求められ見出されると思われる真理と同じように、本当の自由でなくして迷妄にすぎぬ。絶対的必然性を通さなくては本当の自由はない。」と述べている。

さらに同書第二講「大学の学問的並びに道德的使命について」と題した論の中で、大学は、外の国家、あるいは市民社会の中でその独自性を保たなくてはならないとして

「市民社会は、絶対的な目的を損ってでも経験的な目的を追求しなくてはならぬ限り、ただ見かけの強制された、本当に内面的でない一致をつくり得るにすぎぬ。大学は絶対的目的しかもち得ない。それ以外には大学は何の目的をもたぬ。——国家はその意図を達成するためには分離を必要とする。

階級の差異に存する分離ではなくて、個々の才能を孤立せしめ対立せしめることにより、幾多の個性を抑圧することにより、また諸力を全くちがった方

面へ向けることによって、それらをますます国家そのものために役立つ道具たらしめようとするところの、もっと一層内面的な分離である。学問的な組合（注—大学をさす）においては、その成員のすべてはその事実の本性上、唯一の目的をもっている。大学においては学問以外のものは認められてはならぬ、そして才能と教養のつくり出す以外の差異は存在してはならぬ。」

といい、大学の特性を指摘している。またさらに国家権力と大学との関係について

「国家は大学を廃止してしまうか、或は工業学校その他同じような目的の学校に変えてしまう機能を持っているのは争われぬところであるかもしれぬ。しかし国家は最も大事なことを、それと同時に理念の生動や最も自由な学問的活動を欲せずしては意図することはできぬ。」

といい、それは国家のためにも望ましくないはずであるとしている。さらにつづけて世の通俗的な大学論、

すなわち「大学は国家のために、国家の僕を、国家の意図の完全な道具に仕上げなくてはならぬ」という主張をもし忠実に実行するなら、大学と、その生命である学問が道具と化すると同時に学問でなくなってしまう、大局的に見て、国家のためにも損失になることを説いている。

また、これらに関連して大学の教師について

「大学はまさに教師に教師たるの根本の教養を授けるところなのである。彼らに精神的自由を与えるがよい、学問的なことには役に立たぬ考慮で彼らを束縛せぬがよい、そうすれば、上の要求（注―普遍並びに絶対知の精神に基づいて学問を取り扱うという要求）を満たし得る教師は自ら出来上るであろうし、また他をも教育することができ。」

といい、大学の教員は、大学の中で自由を与えられることにより、教員としての根本的な教養を自ら身につけうることに、いいかえれば大学は学生のみならず教員をも成長させる場であり、その原動力は「自由」であ

ることを説いている。

また大学の学生については

（大学生活に入るということは青年学徒にとっては「成年への第一歩」であり、盲信よりの最初の解放である」

とし、学習の自由、すなわち主体的な学習を説いている。さらに学生の教師に対する高度の要求を正当なもの、かつ必要なものであるとし

「要求（注―資質の高い教師たるの要求）の実現は、一部分は学生達自身が大学や大学の教師に向かってなす要求に依存するものであって……」

とものべている。

すなわちここでは、教授の自由の他に、学生の学習の自由をも積極的に主張し、また大学の自由は、無能教員の温存のためにあるのではなく、かえって教員自身のきびしい自己研鑽と、相たずさえて真理の探求への目的に向うための原動力としてあるものだとかえしてのべられている。

## 七 シュライエルマッヘルの大学論を中心

### つづ

シュライエルマッヘルの大学論については *Gelegentliche Gedanken über Universitäten in deutschen Sinn* 1808 の邦訳（梅根悟、梅根栄一訳）から、とくに主題にかかわる部分を取り出して考察して見たい。ただしこの論文は、全体がこの主題にかかわっており非常に興味深いが、紙面の都合上一部分に止める。

まず、彼は国家権力と大学との関連について、国家はその性質上、まとまった知識の体系を必要とし、また学問の団体の方でも国家の保護と援助を必要とするので、ある限界までは両者の提携が可能であるという。しかし国家はまたその性質上利己的なものであるために、外国との知識的交流を好まないのに対し学問は本来インターナショナルな性格をもつので、ここにまず矛盾を生じて来るとのべる。また国家は学問の基礎的、体系的な研究を軽視し、むしろ実的な知識の有用性

を偏重するため、学問の本質にしだいに反するような結果となるといい、そこで

「科学者の団体はこのような傾向に対しては反対しないわけにゆかない。だからこの団体のすぐれたメンバーたちは、一方では自分たちの団体を国家の権力とその支配から引きはなし、他方では彼らの国家に対する影響を一層高いものにしようと努めることによって、できるだけ国家から独立するようにしようとする。できるなら彼らは国家に一層高尚な考え方を注ぎこんでやりたいと考える。しかしそれができないなら、せめて自分たちはできるだけ永く、できるだけ多く、信頼と尊敬に価するものでありたいと願う。」

とのべ、科学者およびその団体である大学が、国家から独立することによって、却って国家に優れた成果を与える結果になるとしている。それに反して科学者が国家にとりかこまれ、政治的なものによって圧倒されるとき、それは国家の御用機関に転落してしまうと

警告している。

また彼は学校（注―初等中等学校、あるいは専門学校をさす）大学、アカデミー（注学士院に相当する）の三者を区別し、この中間的な立場にある大学の役割について、

「（中略）それぞれの個物をそのような個物としてではなしに、その緊密な科学的関連の中において見透し、それらを認識の統一性と全体性という不動の関係の下での大きな関連の中に持ち込むようにし、彼らをしてそれぞれの思索において科学の根本法則を自覚するように学習するようにし、そうすることによって研究し、発見し、表現する能力を身につけさせてやること、こうしたことこそ大学のしごとである。」

とのべ、大学は認識の全体を示してやることがその役割であり、そこから *Universitate* すなわち「総合」大学の名も理由づけられるとしている。

また彼も哲学部の優位を主張し

「もし学者の自由な団結によって一つの大学が作られるとしたら当然、今日哲学部としてまとめられているものが第一の地位を占め、その際国家や教会がそれにくっつけてくれと頼んでくるような専門学部はこの哲学部の下に従属させられるはずのものである。」

といている。そして哲学部こそ自由の根源であるとしている。また

「自由は大切なもので、それがなかったら哲学は発達しないし、その本質を自ら明らかにすることはできないが、しかし、もし哲学部が分割されるような徴候がはつきりして来たら、その自由そのものが存在しがたくなるであろう」

といい、それに前後して、当時の国家その他の機関による大学の改革案を、身勝手な改悪案であると批判している。ついで大学教員の人事についてつねに優秀な教員を確保しようとする場合、文部大臣に任命権をゆだねるのはのぞましくないといい、「学問を没落させ

ないためには、学問の眞の維持者、継承者の選抜には、学者の団体が重要な発言権をもつようにするのが事柄の性質上当然のことではないかとのべながら、また大学自体に人事をまかせ切ることにも、学派、学閥のあらそいにおちいる懸念があるとして、種々の合理的な方法を考えているが、結局のこる方法は「教授の自由」であるとしている。すなわち

「活気にみち、かつ熱心な人で、自分で大学でやっている仕事に価値をみとめ、それを愛している人というものは、このような外的な規則など必要としない。彼は自分の仕事を、自分の最善をつくしてやってゆくために必要なものを自分のうちに持っている。」

といい、「各学部の内においても最大の自由をみとめることが眞の大学精神である」としている。教授の自由とともに、学生の学習の自由、聴講の自由が組合わされれば、自然淘汰により優秀な教員はますます能力を発揮し、無能、怠慢な教員は淘汰されてゆくとの

含みがみられる。

つぎに学生の自由について、かれは二つの面に分けてこれを主張している。

「その一つは（中略）特に彼らの学業に関するものである。彼らは学業に関していかなる強制もうけない。（中略）彼らは大学を出たらどんなことを要求されるか、その時にはどんな試練が彼らをまぢかまえているか、よく承知している。しかしどれほどの熱心さでこの目的にそなえるかは（中略）全く彼らの自由にゆだねられている。」

とし、このような自由を与える理由として、大学の目的は学習の量でなく、「全く新しい生活、より高い、眞に科学的な精神をよび起すことこそ大学の使命である」といつている。次に、彼は学生の自由の第二の側面として

「厳密にいえばこの自由の本質は、学生はお互いに一般の社会で慣例となつてゐることがらのほとんどすべてを無視して、自由に振舞うことができるとい

うこと、彼らは、将来彼らが選んで入って行った身分においてそれぞれその慣習に従わなければならないが、大学ではそんな慣習にしばられていないということ……である」

といっている。第一の自由が学習の自由であるなら、第二の自由は生活の自由というべきであろう。ただしこれは社会の法律や道德からの自由を意味するのではなく、慣習、たとえば服装とか生活様式、礼儀作法などの面の自由を意味するようである。彼にとっては、真理を探究するもの（大学生）は当然道德的水準は高くなければならないということが前提となっている。学生に対するこの第二の自由の必要性は、学生に独立性を養うためであり、また学生は、将来の社会において新しい慣習をつくり出す役割をもつが故に一時期、古い慣習から自由になり、学習の自由とあわせて、真に自らの責任で生きること学ばせようとしているのである。

シュライエルマツヘルに至り、はじめにかかげた大

学の自由の三つの観点、およびその中で細分化したいろいろの要素の大部分がすでに何等かの形でとりあげられているのは興味深い。

## 八　む　す　び

以上、主としてベルリン大学創設の前後の論文をめぐって、近代化における「大学の自由」の思想がはじめて展開した時期を概観した。この諸論文に共通して言えることは、第一に大学教育の中で基本的な認識の方法や、学問の体系の全視野を与えることを、大学の役割として強調し、これを「哲学部」と称したり、他の名称でよんだりしているが、ここに大学の本質があると同時に大学の自由も存すると考えていることである。基礎学、哲学こそ国家権力から自由なもの、また自由を生命とするものだからである。第二に教授の自由を、第三に学習の自由を、それぞれの立場から説いているが、それはむしろ自由のなかのきびしい切磋琢磨を意味している。中世大学の基礎教科であった七自



由科の「自由」（職業に関係ないという意味）は大学の属性としての自由に拡大され、「教員と学生の組合」を意味して発生した「ユニヴェルジテート」の語は、「総合」の意に転化されて、諸学の総合にこそ大学の本質があり、またそこに自由も必然的に伴うものと解されたのである。ただし、これらは、まだイデアリスムスの限界内であり、国家との対立や社会体制の革新という意図は未だあらわれていない。むしろ国家のためによりよいものを与えるためにも、大学は国家から自由でなければならぬと考えているのである。

（未完）